

2021. 9. 30



のびるほとっ子!

もっと ほっと ずっと

横浜市立保土ヶ谷小学校

「言葉の力」

学校長 小川 克之

いよいよ10月を迎え、過ごしやすいわやかな季節となります。

新型コロナウイルスの影響で9月1日(水)から学校が始まり、分散登校がスタートしました。子どもたちの元気な姿が戻ってきたのはとてもうれしいことですが、登校が1日おきになり、教室の子どもたちの数も半分となりました。コロナ対策のためとはいえ、少々寂しさを感じます。

さて、先月の学校だよりでは、サッカー元日本代表選手の福西崇史さんのことを書きましたが、今回は指導者としての立場から卓球の元女子日本代表監督の近藤欽司さんについて書きたいと思います。近藤欽司さんは、(現在は引退されておりますが)鶴見区にある白鵬女子高校の卓球部の監督としてインターハイの連続出場や団体優勝等、数々の金字塔を打ち立てました。その後、女子の日本代表監督やJOCエリートアカデミーの監督などを歴任し、東京オリンピックで銀メダルを獲得した石川佳純選手や平野美宇選手などの指導もされたそうです。

近藤さんは高校の監督している時、指導に行き詰まり、改めて自分自身の指導法を振り返り、反省したことがあったそうです。そこで今まで行っていた勝利至上主義の「勝つ指導」から人としての成長を目指す「育てる指導」に転換したところ、インターハイでも好成績を残し「近藤マジック」と言われたそうです。

具体的には、選手の欠点を修正するのではなく、選手の特徴を把握して長所を伸ばす。そのためには「言葉の力」を信じ、ポジティブな気持ちで練習や試合に臨めるような言葉を掛けることに徹したそうです。選手との会話でも、一方的に言うのではなく、選手の性格やその時の心の内を考え、受け止め方や反応を見て言い方を変えたり、選手の気づきを促したりしたそうです。選手を叱るときも大勢の前ではなく一人の時、褒めるのはみんなの前で行っていたそうです。さらに、選手に掛ける言葉も常にやる気が出る、勇気が湧く言葉を選ぶ。厳しい言葉を掛ける時も、自分が言われて嫌だと思える言葉は使わないようにしていたそうです。

私も教員になりたての頃、ミニバスケットボールの指導をしていましたが、シュート力を高めよう、ドリブルの精度を上げよう、ということばかりに目が向き、なかなかポジティブな声掛けができなかった記憶があります。

人を教える、人を育てることは、簡単ではありませんし、試行錯誤の連続です。10人いたら10通りの方法があると言っても過言ではないでしょう。なかなか思うようにいかないことも多々あると思いますが、近藤さんの指導の中にたくさんヒントが隠されているのではないかと思います。

今後も新型コロナウイルス感染拡大防止を考慮しながら、教育活動を行ってまいります。変更や延期、中止もあるかもしれませんが、ご理解、ご協力をお願い申し上げます。